

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 19 日現在

機関番号：32406

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24820036

研究課題名(和文)近代フランス文学と絵画における「親密な私生活」の表象と発展

研究課題名(英文)Representation and Development of the "Intimate Life" in French Literature and French Paintings in the 19th Century

研究代表者

福田 美雪 (FUKUDA, MIYUKI)

獨協大学・外国語学部・専任講師

研究者番号：90632737

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、近代フランスにおいて「親密な生活(アンティミテ)」がどのように表象され、またその概念がどのように変化したかを、文学(テキスト)と絵画(イメージ)の両方の側面から探った。本来は、内省的な個人の精神生活を指していたアンティミテは、私的空間の装飾を重視する18世紀のロココ美術、そして市民劇や風俗描写を志向する啓蒙時代の文学によって、徐々に「家族や友人との社交生活」を意味するようになる。「アンティミテ」の近代化は、フランス革命を経てのち、七月王政におけるブルジョワ階級の興隆、そして第二帝政期のパリ大改造における都市のインフラ整備において決定的なものとなったことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This study focused on the transition of the "intimate life" in France, between the 18th and the 19th Century. The "intimacy" essentially has a double meaning: the introspective life of an individual, and also the intimate life of a family. The notion of the "privacy" had been developed especially during the Second Empire (1851-1870) when the Baron Haussman demolished radically old buildings and improved his projects (known as "Haussmann's renovation of Paris") after the French Revolution (1789) and the July Monarchy (1830-1848). The decorative arts of Rococo and the civilian society of the 18th century could be considered as the turning point of the French intimate life. The bourgeois class tended to find their comfort in their apartment decorated by French paintings. The intimate life style was really modernized especially in Paris, "the capital of Europe" in the 19th century.

研究分野：近代フランス文学

科研費の分科・細目：ヨーロッパ文学(英文学を除く)

キーワード：親密な生活 近代フランス文学 近代フランス絵画 ロココ美術 フランス第二帝政 パリ大改造 写実主義 自然主義

1. 研究開始当初の背景

本研究は、2010年4月～2012年3月に日本学術振興会特別研究員(PD)として採用された課題「フランス自然主義文学における「私生活」の表象」、および2011年6月にパリ第三大学に提出した博士論文《Le discours de l'intime dans *Les Rougon-Macquart*》で得た成果に基づき計画された。

それまでの研究では、エミール・ゾラを中心に自然主義文学における「公共空間」と「私的空間」、すなわち「内と外」のコントラストの表象を論じてきた。自然主義文学の私生活描写への関心を探るうち、近代フランスにおける「親密な生活」と「心の奥」を指す、《intimité》という両義的な言葉の重要性を発見した。なぜこの語が両義的なものとして認識されているのか、そしてなぜ、自分の「心の奥」「内省」というもともとの宗教的な意味が、近代フランス、とくにフランス革命後のブルジョワ社会においては他者との関係を示す「親密な生活」という意味へと変化したのか、なにがそのきっかけをもたらしたのか、文学や美術にどのような変化が現れたのかを、本研究開始当初に問題として設定した。

2. 研究の目的

本研究は、近代フランス社会の形成に深くかかわる「親密な私生活(intimité)」の芸術的表象が、資本主義・市民社会の発展とともにどのように変遷したかを、文学(テキスト)と絵画(イマージュ)という二つの方向から解き明かすことを目的として計画された。

19世紀ほど文学や絵画が室内情景を描いた時代はなく、したがって私生活の諸相を論じた歴史研究は少なくない。たとえばフランスにおける衣食住の発展史を論じたフィリップ・アリエスとジョルジュ・デュビ共編の大著『私的生活の歴史』(1985-87)以降、社会・建築・文化的側面から私生活史を総体的に捉える機運が高まった。日本でもアルフレッド・フラン克蘭の『パリの私生活』(1890)全23巻の邦訳刊行が2012年より始まった。しかし文学と絵画の双方から「親密な私生活(intimité)」に注目した研究はまだない。とくに文学研究ではアンティミテは重要な要素とみなされず、フィリップ・アモン編『フランス風俗小説テーマ辞典 1850-1914』(2008)にも《intimité》の項はない。しかし《intimité》とは無縁とされてきた自然主義者(ゾラ、モーパッサン、ユイスマンズら)にも「親密な私生活」への関心は遍在しており、文学史の定義自体を再考する必要がある。本計画は、「親密な私生活(intimité)」の表象をめぐる文学と絵画の相互的發展という観点から、芸術家たちの潜在的な繋がりを浮き彫りにし、二つの分野の

学際的研究に寄与する糸口を見つけることを最終年度までの目的とした。

3. 研究の方法

「親密な生活」の理想と実態を、絵画や文学がどのような視点や切り口で描いたかという問題を、社会的文脈に即してたどるため、具体的な作品分析と歴史資料の収集という二つの側面から研究を進めた。私的な生活の表象は、描かれる人物の職業や階級、部屋の種類によって多様であり、かつそれを描いた画家や作家の生きた時代の文脈によっても異なってくるため、「アンティミテ」というある意味ではあいまいな領域をどこまで画定し、定義するかが本研究の課題であった。

平成24年度は主に、革命以前の18世紀フランスにおける、貴族や富裕なブルジョワ階級の私生活、そして革命前後の近代市民社会の萌芽、それに伴う絵画や文学における「アンティミテ」の表象の変遷、絵画と文学の相互的影響を調べた。具体的には、ヴァトー、ブーシェ、フラゴナール、シャルダン、グルーズといったロココ美術の代表的な画家が、フランドル・オランダの風俗画から受けた影響や、ディドロ、ルソーら啓蒙思想家による市民風俗画の受容、さらにはラクロワメルシエのテキストにおける「私生活表象」を比較して「アンティミテ」をめぐるパラダイムシフトの生成を明らかにした。近代文学において「アンティミテ」が脚光を浴びるためには、18世紀後半の市民演劇を経て、19世紀初頭のメディアの興隆にともなう小説というジャンルの確立を待たなければならなかった。しかし、ルソーの『告白』を嚆矢とする「個人」の権利の称揚、ロマン派の小グループ「セナークル」の形成、私生活の幸福を説くミシュレら思想家の出現は、第一帝政、七月王政下における都市環境の整備、私的空間の充実と並行して起こっている。この点において、「アンティミテ」は歴史・社会・芸術文化が絡み合い発展していくフランス史をひもとく重要なキーワードであることが示された。

平成25年度は、前年度の18世紀～19世紀初頭の絵画・文学研究の成果を踏まえ、革命後に盤石となった七月王政(1830-48)第二帝政(1852-70)における「アンティミテ」の表れを分析した。とくに第二帝政下のセーヌ県知事オスマン男爵によるパリ大改造に注目し、モニュメントなど公共建築のレベルのみならず、アパルトマンのような個人建築のレベルで住生活環境にもたらされた価値観の変化が、フロベール、ゾラらの自然主義文学、さらにマネ、モネ、ルノワールらの印象派の絵画にどのような影響をあたえたかを調べた。エミール・ゾラの『ルーゴン・マッカール叢書』全20巻、とくにパリ大改造を描いた『獲物の分け前』(1873)に豊富な私生活表象が含まれることから明らかかな

うに、現在われわれが理解し共有するところの「親密な私生活」という観念は、第二帝政期にかたちづくられたと言っても過言ではない。パリ大改造がブルジョワ階級の生活風景にもたらした影響は、観劇スタイルの変化や印象派の風俗画、モード業界の発展など、あらゆる文化史的文脈に見出すことができるのである。

いずれの年度においても、所属の獨協大学図書館所蔵の19世紀版画、新聞、書籍などを参照したほか、年1・2回渡仏の機会をもち、フランス国立図書館での資料収集、フランスの研究者との打ち合わせにつとめた。

4. 研究成果

(1) 個人研究の進展

本研究の最大の成果は、18～19世紀末までの幅広い絵画(イマージュ)と文学(テキスト)を、「親密な私生活(アンティミテ)」共をめぐる諸相のもとに、共時的な視点から結びつけるアプローチが有効であると一定の説得力をもって証明できたことである。「アンティミスム」は19世紀末に文学では象徴派、美術ではナビ派に現れるというのが通説であったが、ロココ時代から自然主義までの芸術運動を、「アンティミテ」を希求する市民社会の要請にこたえる変化として包括的にとらえなおすことができた。

現在フランスでは、世界的な自然主義の潮流を網羅する試みとして、コレット・ベッケルを中心に『自然主義文学辞典』の編纂が進行中である。本研究もこうした学際的な企図に呼応し、対立的、もしくは無関係とみなされてきたシャルダン、フラゴナール、マネ、カイユボット、あるいはディドロ、ルソー、ラクロ、ポーマルシェ、バルザック、ゾラ、ユイスマンスなど、時代背景も美学も異なる芸術家たちを「アンティミテ」の問題系のもとに結びつけ、文学と美術の相関関係、私生活史の再構築、そして自然主義の再評価という3つの側面から、一定の成果を挙げられたといえる。

また、本研究を進めている間、印象派グループのカイユボットや、ナビ派のヴァロットンといった、これまで脚光を浴びる機会の少なかった画家の展覧会がパリ・東京で行われた。彼らの都市風景画や室内画にもまた、第二帝政以降に確立した「親密な生活」諸相ははっきりと表れており、今後の研究を進めるうえでの新たな手がかりとなった。

(2) 国内の研究者との連携

フランス文学が、文学の枠を超えて、歴史・芸術・社会との接点をさぐる領域横断的な研究が盛んになった昨今において、近代フランスにおける「文学」と「絵画」の結びつきを探る本研究もまた、専門の近い研究者と

の成果交換によって、より広い視野のもとに進めることができたと言える。

たとえば、2013年にはフランス文学専門の若手研究者が、「フランス文化をパリのモニュメントから」と題し、日仏会館でシンポジウムを行った。さらにその成果を共著『フランス文化読本』として刊行した。これは、モニュメント(公共建築)の成立・受容の背景を読み解くことで、歴史・社会・芸術が複雑にからみあうフランス文化の奥行きと広がりを探る試みであった。この「モニュメント」(公共建築)に光を当てることは、パリの都市空間・都市風景の成り立ちをたどることであり、そこには必然的に「アンティミテ」の問題系が含まれてくる。「私的空間」は「公的空間」なくしては成り立たず、逆もまた然りであって、近代フランス、とくにパリを論じるとき、本研究は内外の研究者から参照されるべき問題系を見出したと言えるだろう。

今後は、「モニュメント」研究と「アンティミテ」の研究を、「公」と「私」の対立と共存という観点から結びつけ、関連分野の研究者とも研究の進捗状況を共有し、協同することで、採用期間中に発見した課題をさらに発展させる。これまで活動の主軸としてきた日本自然主義研究会、日本フランス語フランス文学会における活動のほか、日仏美術学会、日仏比較文学会所属の研究者との連携、学会発表等を視野に入れて研究を進めていく予定である。

(3) 国外の研究者との連携

2013年6月8日には、獨協大学にてゾラ研究の専門家アラン・パジェス教授(パリ第三大学)の講演会を企画・通訳を行った。この講演は、「パンテオンに眠る作家エミール・ゾラ」と題し、国家の偉人としてドレフュス事件でドレフュス大尉を擁護したエミール・ゾラが、モニュメントに祀られるようになった経緯と、その儀式が社会にもたらしたインパクトをめぐるものであった。モニュメントのテーマは、本研究で扱う「私的空間」と対をなす「公共空間」にかかわるものであり、モニュメント(とモニュメントをとりまく都市風景)をどう考えるかという問題は、対置される「室内空間」をどうとらえるかにつながってくるという意味で貴重な示唆を受けた。

2013年11月29日には、学習院大学において、フィリップ・アモン教授(パリ第三大学名誉教授)の招待講演の通訳を行った。この講演は、「19世紀の広告と文学」がテーマであり、とくに第二帝政のパリ大改造にともない、大衆消費社会とアートが連動し、都市風景に結びついた経緯と、その結果もたらされた文学者・画家たちの芸術観の刷新が論じられた。19世紀フランスにおけるテキストとイマージュの関係を扱ってきた本研究にとって、19世紀の豊かなイマージュの体系を掘り起こすアモン氏の講演

は貴重な示唆をもたらした。また本講演をきっかけとして、公的空間・私的空間における 19 世紀のテキストとイメージの関係を解き明かしたアモン氏の主著 *Imageries* (2006 年) を、2015 年に水声社から刊行する運びとなった(共訳)。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

福田(寺嶋)美雪、「『獲物の分け前』が描くパリのパノラマ：第二帝政下の都市大改造」、『フランス文化研究』45 号、獨協大学外国語学部フランス語学科、2014、19-44

Miyuki TERASHIMA-FUKUDA, 《Les avatars du naturalisme français au Japon : du roman naturaliste au roman personnel 》, in *Re-Reading Zola and Worldwide Naturalism*, Cambridge Scholars Publishing, 2013, 285-297

福田(寺嶋)美雪、「18 世紀のフランス絵画と文学における「親密な生活」の表象」、『フランス文化研究』44 号、獨協大学外国語学部フランス語学科、2013、45-71

〔学会発表〕(計 2 件)

福田(寺嶋)美雪、「オペラ座：絢爛の祝祭空間」(招待講演) 日仏文化講座『フランス文化をパリのモニュメントから』、日仏会館、2013 年 10 月 19 日

福田(寺嶋)美雪、「「私」を語る試み—『クロードの告白』における自伝性の問題」、日本自然主義研究会、慶應義塾大学、2013 年 3 月 29 日

〔図書〕(計 1 件)

福田(寺嶋)美雪 他 『フランス文化読本』、丸善出版、2014 年、14-25, 86-97, 110-133

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

福田(寺嶋)美雪

(FUKUDA-TERASHIMA MIYUKI)

獨協大学外国語学部・専任講師

研究者番号：90632737